



【彼氏の愛が重すぎる】

第三章

著者：枝湊菰



純平と付き合いだした。

「これで何回目かの告白でやっとだよ」

「何回目？」

「うーん、多分五十回くらいかも」

「ふふっ、たしかにそれくらいは言われてるかも、ずっと愛してくれてありがとう」

「うん」

ベッドの上で抱き合い、やりたい衝動にもかられるが純平が用意していたデートプランを実行することになった。

「で、どこに連れて行ってくれるの？」

「ん？ 思い出の場所だよ」といい車を走らせた。

「目的地が分からないというのもなんとかな」

「初めて伊織を抱いた場所覚えてる？」

「あれは那須高原の中嶋旅館だろ」

「そう！ で、なにした？」

「なにしたらって初めてのつてやつ」

「じゃなくても、伊織はすぐにHなこと考えるんだから」

「おい、俺を変態扱いするな」

「旅館に着く前になにした？」

「旅館に着く前につて、紅葉見て……あ！！ ここ ここ那須どうぶつ王国、たしかカピバラみた！」

「正解」

「まさか今日はあの日の再現でもするのか？」

「うん、だってお付き合い初めての場所だもん♡」

うきうきしている純平が可愛く見えた。

チケットを買って入場しようぶつを見学する、ここは一部のどうぶつと触れあえるところで楽しくまわれることができる。

高校の時はまだ車なんて無かったから電車とバスを乗り継いできたけどやっぱ浮かれてる伊織可愛いな♡

「あ！ 痛い痛い」

「アハハハ、リス乗っかってるだけだよ」

「そうなんだけど……爪が……刺さってる」

「それにしてもすごい集まりようだね、伊織なんか特有のフェロモンでもまき散らしてるの？」

「し、しらねえ、てか純平もこいつ持ってる」

「ああ、もう可哀想だろ」

次に向かったのはコツメカワウソの飼育現場だった。

「か、かわいい」

二人揃ってハモるもんだから周りの人に笑われてしまった。

「おほん、男二人でかわいい連呼するもんじゃないね」

「なに、真面目になってるんだよ、こんなの言ったもん勝ちだろ」

「まあそうなんだけども、この子達今年生れた子だって」

「ねねだって、メスだ、可愛いな」

「寧音……」

「あ、川田のこの奥さんの名前だっけ？」

「うん、……ちょっとトイレ行ってくる」

あーやらかした俺のバカ。トイレの外で待っているが伊織は一向に出てこなかった。メールすると伊織のカバンを持っていることに気がついた。

そうだ、リスの時から俺が持つてるんだった。

まさかなにかあったんじゃ、伊織はリス並みに可愛いから。

ばつとトイレに入ると間抜けの空だった。

「あれ？」

「おい、なにしてるんだよ」

「あ、伊織いた、どこ行ってたんだよ」

「さ、さつきカワウソ可愛かったから売店でストラップ買ってきた」

「……ありがとうってお金は？」

「スマホで決済した」

「あれ？ 持ってたの」

「持ってたよ、お前からの連絡がきたから早く帰ってきたんだよ」

なんだそうだったんだ、ていうか待って俺愛されてる。

次に訪れたのはバサーッと羽ばたくフライトパフォーマンスの会場だった。

「見てすごいよ、伊織、かっこよすぎる！！」

「ちよっはしゃぎすぎだって、子供より目立ってるよ」

「ふふっ」

「おい！！」

「いやだってさもう空を滑空して投げられた餌をキャッチしてもうなに、なんなんだよかっこいい！！」

「なにつてタカかワシだよ」

「伊織テンション下がる、なんでこのかっこよさが分からないの」

「……いやかっこいいんだけど、ただお前がはしやぎすぎだつてこと！！」

「伊織、後でたくさん相手してあげるから今は集中させて」

「あーもう分かったよ」

